

あいち障害者センターNEWS(号外)

2025年7月

(講師派遣・研修版)

発行:NPO あいち障害者センター

竹沢先生に学ぶ～

上田は、まだ現場でヘルパーとして走り回っていたころ(ずいぶん昔)から、何度も竹沢先生のお話を聞いてきた。

講座を受け、実践記録を書き、竹沢先生に翻訳?していただいたことを思い出した。

その時の記録を、パソコンから見つけた。一服しながら一笑ください。



実践記録 治さんが“紳士”に見えてきた

＜治さん(仮名)は36歳(男性)で、自閉症＞

作業所から自宅までの移動支援を開始した。

わずか、週1、2回の支援ではあるが、これまでの4年間を振り返ると、そこには治さんの足跡がしっかりと残されている。

当初、「オウム返し」と聞こえていた言葉は、今は、会話として私の耳に聞こえてくるようになってきた。

「立ち止まり」、「手につばをつけ、ペッと路上に吐く行為」、「人差し指の関節2本分くらいを鼻の中に押し入れ、フンフンと鼻を鳴らすしぐさ」、「バスの窓の縁を、タオルや手で拭く」など――。

4年前も今も「変わらない」言葉としぐさではある。だが、確実に変わってきたことがある。

それは、治さんを捉える私の視点。4年かかって、ようやく、治さんを“ひとりの好紳士”として、見つめることが出来てきた。

＜小さな“わかりあい”の積み重ね＞

何度も何度も、同じ単語を伝えてくる治さんに、当初は、オウム返しで返していた。あまり気にもかけずに、とにかくオウム返しの対応をしていた。

ある日のこと。いつものように、「せきこえのどに」に、「浅田飴」と答え、「ゴホンといえ」に「龍角散」と答えるやりとりをしていた。ところが、たまたま、私が「せきこえのどに龍角散」と言ってしまった。治さんが、すかさず、「浅田飴(でしょ)」と返してきた。

「ごめん、間違えた」というと、治さんが、横目でチラッとこちらを見る。その表情はとても穏やかだった。

これはオウム返しではない。会話だ。

これまで私がオウム返しとってきたのは、もしかして、治さんをとらえ切れていなかったことから来ていないか。治さんとしては、伝わらないから、何度も何度も伝えようとしていたのではなかったのか――。

治さんの言葉に、よく「競馬」が出てくる。ある日も、「うま、うま」というので、「今はねえ、お馬さん、インフルエンザでレースお休みだよ」と伝え、腕をもみもみしながら「注射」と返してきた。「おお～、インフルエンザだから、そうきたかあ」と喜ぶ私。

「しゅろい、しゅろい」と、歯を指差す治さん。私は、「虫歯？ヒドイ、ヒドイ？」と勝手に解釈して対応する。母親に確認すると、口内炎で「白い、白い」だった。

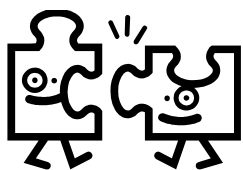
しかし、週1、2回の支援では、その訂正のチャンスは、なかなかやってこない。

忘れた頃に、同じ訴えがあった。私はすかさず、「口内炎出来たの、本当だ、白いねえ、痛いねえ」と返した。すると、その訴えは、スッとおさまった。

いつものやりとりの中で、(あれっ?)と思う瞬間の積み重ねは、私だけではなく、治さんも感じているのかも知れない。(エッ、上田さん、わかってくれたか)と治さんも思っていたかも知れない。

単語だけだった言葉のやりとりは進化し、「バリカン、シャージャー、シャンプー、ゴシゴシ、おつかれさま」「お寺、お抹茶、おまんじゅう、おいしかったぁ」「パトカー(のうた)うたえ」「笑わない、笑わない、笑うな、おかしいねえ」と、会話に発展をしてきた。

そんな積み重ねが、お互いの距離を縮めているのかも知れない。



＜「落ち着かないしぐさ」にも意味がある＞

「立ち止まり」「つばはき」「指突っ込み」など——はじめに書いたしぐさの繰り返しは、自閉症のパターン化、こだわりだと漠然と捉えて

いた。事実、パターン化されて繰り返すこともある。

それで、私は、許容範囲、と認めてみたり、バスの中などではだめだよ、と抑制を試みたりするなどの対応を繰り返した。ある日、バスの中で、制止する私の腕からすり抜け、つばや鼻水でベタベタのタオルを振り回し、運転席から後部座席まで、ヒャーヒャーと窓拭きをされた時には、さすがの私も立ち尽くした。

治さんも「言葉」でのコミュニケーションができる。そう思うにつれ、これまでの、落ち着かないしぐさは、気持ちが伝わらないもどかしさや感情をうまくコントロールできない苛立ちではないかと思うようになってきた。また、しぐさそのものは変わらないが、「言葉」がつながったときには、同じしぐさでも、穏やかで紳士的でもあるのだ。

ある日、開ロ一番に、「パチンパチン、正座、お父さん」と興奮気味に訴えてきた。私が、「治さんがいうこと聞かないから、お父さんに叱られたんだぁ。何で叱られたかわからなくて、悲しかったんだねえ。辛かったねえ」というと、一瞬、顔が泣き顔に歪み、ずっと落ち着く。

「治さんは悪くないよ、上田さんがお父さんに一緒に謝ってあげるから、早くバスに乗ろうね」と誘導。言ったことがほんとにわかったのかどうかわからない。だがその後、スムーズにバス停まで移動した。立ち止まりもつば吐きもなし。窓拭きもなく、何事もなくバスに乗車できた。

お父さんにその話をすると、「そんな事まで話すの」と恐縮していた。私は「治さんが、感情表現が上手になって伝えられるようになったこと、気持ちの整理を自分でつけられるようになってきたこと」を強調して伝えた。また叱られないようにと、祈りながら…。

＜ヘルパーも生活リズムの一端を担う＞

作業所の多くは、安全に、何事もなく自宅へ送ってくればそれでいい、ととらえている。だが、ヘルパーも作業所の職員と同様、彼の生活リズムの一部を担っている。対等な立場での役割分担であるにとらえたい。

治さんの伝えたいことを、短い瞬間で察知し、いかに見当はずれではない対応に結びつけるか。そのためにも、作業所や親からの情報が重要となる。作業所から自宅までの短い支援であっても、その引継ぎの大切さと役割を意識した支援につなげたい。

言葉だけでなく、感情が伝えられると、パニックやストレスを上手に回避できる
——そんなことを家族や職員と共有したい。

(2009 年 原作：上田麻里子 ・ 翻訳：竹沢清さん)

上田の言いたいことは、皆さんに伝わったでしょうか。

質問は受け付けません。うまく「評論」できませんので m(_ _)m



その後の治さん

治さんが変わることで、いえいえ、治さんは何も変わっていないのです。

こちらがわかってあげられなかっただけなのです。

一語文のオウム返しは、会話へと発展し、治さんと会話ができることで、ご家族も、作業所職員も、ヘルパーも、変化がみられました。

これまで作業所の一泊旅行は、迷惑がかかると参加していませんでしたが、作業所から行きましようとお声をいただき、はじめて参加をしました。

旅行でお酒を飲んだこと、に加え、楽しかった～と何度も話してくれます。

バス、刺身、ビール、温泉、おいしかった～、楽しかった～。

会話になっています。

「掃除せんでいい」と怒ってばかりいた父も、「ちょっと掃除すれば納得するんだけどなあ」とこだわりを理解する言葉もきけました。怒られることも少なくなったのでしょう。

おとうさん、ピシッ。の訴えが減りました。

体を張って、無理やり静止をさせていた行為も、言葉で伝わり、「待つ」こともできます。

会話が伝わることで、落ち着かなかった行為が、穏やかになってきています。

会話もどんどん増え、言葉のキャッチボールを楽しんでいます。

「きちゅねうどん」「ああ、きつねうどんね、食べたの?」「き・ちゅ・ね・うどん」

「うえださん、おこってるよ」「ごめんなさい」「エッあやまっちゃう?」

「今日ヘルパーさんだよ」「うえだ、うえだ」「上田さんは忙しいから来ないよ」

新しいヘルパーさんを紹介するとき、またスタートラインからの関係づくりのやり直しかと思われたのですが、新しいヘルパーさんの受け入れも早くなりました。

さすがに、4 月作業所職員の異動や新しい仲間等々でざわつく時期には、少し落ち着かないこともあります。大きく後退するわけでもなく、落ち着きを取り戻すまでにかかる期間も短くなりました。

10 年たって、ヘルパーイコール「うえだ」と、数少ない名前と呼ばれる存在だった上田ですが、ついにその座を譲ることとなりました。

現在支援に入っているヘルパーさんを名前で呼んだのです。

(2016 年 原作：上田麻里子)





自分らしく暮らす支援を

センター 講座2025



センター研修スペース 10:00～12:30

9/20土

直子先生に学ぶ
発達理解

人間発達の面白さ、
学び考えてみよう

2026 2/21土

直子先生に学ぶ
保育と療育

子どもたちのステキ
さを輝かせるために

▶開催方法:

会場(12名程度)と
オンライン

▶参加費:

各回3000円

プチ・もやいカフェ

12:30-13:30

9/20 ・ 2/21

直子先生とともに
ワイワイ茶話会です。
お茶は出ませんけど、
雑談しましょう。

6/22日

竹沢先生に学ぶ
実践と記録

その「糸口」と
勘所

12/7日

竹沢先生に学ぶ
問題行動から願
いを探りあてる
実践

あいち障害者センター

名古屋市熱田区神宮2-3-4

最寄駅：熱田神宮伝馬駅・名鉄神宮前駅

mail : asc732@spa.nifty.com

tel : 052-682-7911

fax : 052-682-7916